

talk! talk! talk! タレント・兵藤ゆきさん



タレント 兵藤ゆきさん

親しみやすい笑顔とキャラクターで、テレビ、ラジオ、書籍など様々なメディアで活躍する兵藤ゆきさん。出産を機にニューヨークに住まいを移し、今年の夏にはニューヨークのガイドブックやニューヨークで経験した様々な出来事をまとめたエッセイを発売した。そんな兵藤さんの気になるニューヨークでの生活や子育てのこと、そして、10年前から始めたカメラのことなどたっぷりとお話をお伺いした。

プロフィール

ひょうどう・ゆき。愛知県、名古屋生まれ。常磐女学院デザイナー科卒業。東京・名古屋・大阪で深夜ラジオのパーソナリティを皮切りに、個性的なキャラクターでテレビ番組に登場し、その後、エッセイ、脚本、作詞、歌手、小説等ジャンルを超えて幅広く活躍。1996年、長男誕生後、子育てのためニューヨークに渡米。著書に、『ど頭にイッパツまわし蹴り』大和書房、『NHKおもいっきり中学時代』TIS、『兵藤ゆきの猫ナンバ日記』KKベストセラー、『ニューヨークの犬たち』ワニブックス、『僕が僕である理由』双葉社などがある。また、2002年7月には、エッセイ『ぶんちんタマすだれ』、ガイドブック『ゆき姐のニューヨーク裏うら散歩』がワニブックスから同時発売された。

ニューヨークで見たかわいい子犬が カメラを本格的に始めるきっかけに

カメラを始められたきっかけというのはなんだったのですか？

本格的に始めたのは10年ほど前、仕事でニューヨークに行った時です。そのときに見た犬たちがどの子もすごくかわいいんです！ それで、この犬たちを撮ろうと思ったのがきっかけですね。

犬ですか？

そうなんです。ニューヨークを歩いていると、たくさんの犬を見かけるんです。アメリカはペット大国と呼ばれるほど、多くの家庭でペットを飼っているんですよ。ニューヨークも例外ではなく、多くの方がペットを、特に犬を多く飼っているようです。

でも、やはり都会ですから、「散歩をするときは必ずリード（散歩用のひも）を付ける」とか「他の犬と出会っても吠えないなどのしつけをする」など、犬と上手につき合うためのきちんとしたルールが決まっています。そのかわり、リードをはずして、犬たちがのびのび走ったり遊んだりできる、ドッグランとよばれる犬のための広場がたくさんあるんですよ。

では、あちらこちらで散歩している犬を見る機会があったんですね。

そうですね。散歩している犬もかわいいのですが、特に、ドッグランなどでのびのびと走り回って遊んでいる犬を撮りたくなったんです。たまたま見かけた子犬がフリスビーを追いかけて、キャッチしようと飛び上がった瞬間をねらってそのとき持っていたカメラで撮影しました。でも、現像してみたらものすごくブレていて（笑）。

もともとカメラは持ち歩かれていたのですか？

それまでも仕事で海外に行くときなど、記録として残そうと思って写真を撮っていました。でも、そのとき持っていたカメラのシャッタースピードでは子犬のスピードをとらえきれなかったんですね。

なんで撮れないんだろう、どうしたら撮れるかなって考えて。そうか、細かい設定を自分で変えることのできるカメラじゃないと、あの子犬は思うように撮れないんだなってはたと気づいたんです。それをきっかけに、写真にどんどん興味がわいてきて、よく撮影をするようになりました。



『ニューヨークの犬たち』よりドッグランの看板に足をかける愛嬌たっぷりの犬。ここでストレスを発散しているので、街を歩くときはとてもお行儀がいいそうだ。

「ニューヨークでは余計なお金と時間を使わなくてすむのかなあ」

話は変わりますが、兵藤さんはご出産後、ニューヨークにお住まいを移されたのですよね。

本当は嫌だったんですけどね。夫がニューヨークに留学しているもので、家族で一緒にいるには私と息子がニューヨークに行くかと。もう6年ほどになります。

ニューヨークの生活はいかがですか？

息子も6歳になり、9月からニューヨークの小学校に通っています。ニューヨークでは子育て中心の生活ですが、東京とはだいぶ違いますね。

どのように違うのですか？

東京はモノや情報がいたるところに溢れていて、流行が目まぐるしく変わる街ですよね。東京にいてもどうしてもそれが気になる私が出て、振り回されてしまいます。

たとえばスーパーマーケットに行くと、食べ物から日用品、洗剤ひとつとっても次から次へとチェンジしていく。息子も、たまに日本に帰って来て一緒にスーパーマーケットに行くと、おもちゃ付きのお菓子がこれでもかーというくらい並んでいるのがとても楽しくて、つつい欲しくなる。私も息子も、それが本当に欲しいものかどうか、売り手側のワナにまんまとひっかかっているのか、欲しいもの前でよく話し合いをするんです。で、二人で「なんでこんなことでモメなきゃいけないのよね」なんて言っています。

また、その時間も取られてしまう。

そうそう、そんな余計なことじゃなくて、もっと違うことで時間を使ったり、楽しい話をしたいよねって。でも、毎日目をつぶって、耳をふさいで歩いているわけにもいかないし、テレビをつければ宣伝が流れ、街を歩けば面白そうなものがいっぱい並んだお店があるし、もう、どこもかしこも「寄ってらっしゃい、買ってらっしゃい！」って。東京にいて、欲しい、買いたいという気持ちとの戦い！

ニューヨークではそのような気を起こさずに過すことができるんですか？

そうですね。スーパーマーケットにはだいたいいつも同じようなものが並んでいるし、目新しいものもそうそう日本のようには出まわっていないように思われますし、あまり物を買い替える習慣がないんですね。すごく立派なマンションに住んでいても、使っているテレビはリモコンではなくて、手でつまみを回してチャンネルを変えるような古いものだったりするんです。物をとても大事にしている、いいものを長く使う精神があるような気がします。

ニューヨークのほうが兵藤さんに合っているんですね。

いえいえ、そうではなくて、ニューヨークの方が余計なお金と時間を使わなくてすむのかなあって。私はやっぱり日本が好きです。便利だし、平和だし、街がきれいだし食べ物おいしいし。

でも、ちょっと疲れる。って自分で疲れさせているんですけどね。



『ゆき姐のニューヨーク裏うら散歩』より
レバノン、イエメン、イランの移民
が多く暮らすアラビックタウンに
ある雑貨屋さんで、奥にいた
猫を撮影。後に写る
アラビアン風の布は
この猫のペットだそうだ。

写真はニューヨークでのコミュニケーションツール 「みんなで写真を撮り込んで話すのって、なんだかいいですね」

ところで英語は話されるんですか？

いえ、まだまだです（笑）。もともと全く話せなくて、そのうち自然に話せるようになるかしらと思っていたのですが、6年たった今でも、ゆっくり話してもらって理解できるというぐらいなんですよ。

ではお子さんも日本語を？

私とは日本語で会話をします。ですから3歳ぐらいまでは日本語の方が強く入っていたみたいで、英語は単語をポツポツと言うぐらいでした。でも幼稚園の年中組に上がるときに、本人の希望で日本語のところから英語のところに通わせることになったんです。そうしたらあっという間に英語を話すようになりましたね。

小さいうちはやはり上達が早いんですね。

ほんとうに早いですよ。びっくりするぐらい。そうすると、日本語での会話は家の中だけになるので、今度は日本語のほうがちょっと弱くなる。でも、今年の夏休みに日本で3ヶ月ほど過したら日本語もとても上手になり、もうペラペラ大人みたいに話しています。お見事です。

お子さんの写真もよく撮影されるんですか？

はい、いつも撮っています。やっぱり子供が登場してしまうと、母親としては撮影せざるを得ないといえますか（笑）。子供の一番輝いているところ、自然な笑顔を見せたところ、そういう所を撮りたいじゃないですか。最初に犬で写真のレッスンをしましたから、そういった一瞬を撮影できるようになったのはうれしいですね。この間もお友達同士でちっちゃなプールで遊ばせていたのですが、みんなとってもはしゃいで、いい顔をして笑ってましたよ。それを何枚か撮影して、お母さんたちにあげたんです。よく撮れた写真はいつもそうしているんですけど、私の撮った子供の写真はすごくいい表情だって言うくださったりするんですよ（笑）。

兵藤さんならではの感性で撮影されているから、他のお母さんが撮られたものとはまた違った表情の写真が撮れるんでしょうね。それもあるとは思いますが、ただ私の場合、他のお母さんよりカメラに対する興味が少し多いのではないかと思います。他のお母さんたちは、興味はあっても、露出を変えて撮るとか、そこまではしていないですよ。一枚撮って、はい、次、みたいに。

私はけっこうしつこく、ひとつの構図で撮影をするんです。たとえば早い動きだったらシャッタースピードを変えたり連写を試したりしながら何枚か撮影します。そうしてやっと、一枚これだっという写真が撮れるんです。



『ゆき姐のニューヨーク裏うら散歩』より
ランド・セントラル駅から約20分
ほどの場所にあるジャクソン
・ハイツ駅のそばで桜を発見。
ニューヨークの美しい桜を
見て思わず一枚。

息子の写真は基本的におふざけ写真が多いんですが、でも、やっぱり息子が撮ったものはすぐわかります。

将来は名カメラマンですね（笑）。では、兵藤さんのお宅のアルバムは、兵藤さんと息子さんが撮影されたものが並んでいるんですね。

そうですね。でもアルバムを見ていると、私があんまり写っていないんですよ。お父さんと、息子と、息子のお友達と……。お母さんはいないのか!? っていう状態。だから必ず「撮影者」って入れて、私の名前を書いておくんです。家族のアルバムですからね。ちゃんと私も入れないと（笑）。



『ゆき姐のニューヨーク裏うら散歩』より
屋下がり、砂場で遊ぶニューヨークの子供達。
遊びに熱中する子供たちと
それを見守るお母さんたち。
ほほえましい様子が伝わってくる。

いい表情はそう簡単には撮れないようですね（笑）。でも単純に、子供の写真をもらうというのは、お母さんたちにとってはとても嬉しいですよ。

そうですね。写真をあげるとみなさん本当に喜んでくれるんです。喜ばれると私も嬉しくて、また撮りたくなります。

それをきっかけに会話が弾むこともあるのですか？ コミュニケーションがとりやすくなるといえますか.....。

はい、やっぱりありますよ。あと、写真を見せるというのもいいですよ。家にお友達を呼んで、私がお茶を入れている間に、「これちょっと見てて」って撮った写真を渡しておいたりね。それで、「これはどこ？」とか言いながらみんなで写真を撮り込んで話すのって、なんだかいいですよ。

最近では息子もよく写真を撮っているんですよ。だからお友達同士でも、見せたりあげたりして楽しんでいるみたいですよ。

そうですね！ 6歳にして写真を撮るんですね.....すごいです。

もうちのぐらいでしょうか？ 多分4歳ぐらいからかな？ 私がいつも撮っているものだから、「ママが撮ったから、僕も同じだけ撮る！」って言い出して。私が撮ると、「今何枚撮ったでしょ」って言われるので、よく数えてるなって思いながらカメラを渡しています。自分も撮らないと気がすまないんでしょうね（笑）。

腕前はいかがですか？

いや、もうピシッと撮ってきますよ。お友達の顔をよく撮るんですが、必ず変な顔をして写っている子とか、どんな時でもピースしている子とか（笑）。子供同士の目線で撮影されているから、余計にその子たちの個性とか、雰囲気とか伝わってきますよね。とても面白いですよ。

見たままの感動が伝わるような写真を「今後もずっと撮り続けていきます」

今年の7月に、ニューヨークの生活をつづったエッセイ『ぶんちんタマすだれ』、そしてニューヨークのガイドブック『ゆき姐のニューヨーク裏うら散歩』を発売されましたね。

はい。裏うら散歩に掲載している写真は私がニューヨークで撮影したものをそのまま載せています。駅の中とかね、ちょっと暗かったりしているんです。だから、たとえばちゃんとした機材をかかえて撮影してもよかったんですけど、写真を見てみるとなんだか違う感じがしてしまって。臨場感が違うんです。ガイドブックの写真は明るくてきれいに写っているのに、実際に行ったら違うじゃないのっていうことになるのが嫌だったんです。

最終的には本を作ったデザイナーさんと相談して、肉眼で見た、原形に近い感じを大事にしようということで、私が撮影したそのままを掲載しました。

本を拝見しましたが、確かに紹介用に撮影された写真というよりは、そのままその場所を切り抜いたというような印象を受けます。

実際にニューヨークに来てみて、日本で見た写真と全然違うじゃん！って感じるのがよくあるんです。ニューヨークはとても古い街ですから、あちこちに修復のあとがあって、汚れもあります。写真はきれいに写し過ぎちゃっていますよね。ガイドブックですから、いかにテクニックを使ってそこをきれいに見せるかという考え方もありますけどね、私はやはり見たままを伝えたいと思いました。

ガイドブックではなく、普段写真を撮影される際に気をつけていらっしゃることはなんですか？

普段もだいたい同じなんですけど、見たままを、真実をいかに写せるか、ということに重点を置いています。最初に犬を撮ろうと思ったときに、犬の走っているスピード感をそのまま写したかったんです。ところがその時はそれがなかなか伝わらなかった。その頃から、その時見て、感動したことをそのまま写しとれるような写真が撮れたらいいなって思っています。

それは、お子さんの顔を撮影するときも同じですね。

そうそう。いい顔って思った瞬間、その見て感じた瞬間をそのまま絵にしたいですね。あとはね、写真を人に見せて、その人にも私が撮影した時と同じような感動を感じてもらえたらいいですね。

最後に、今後撮影してみたいものはありますか？



ニューヨークですね。まだまだ撮影しきれっていませんから。どこに行っても撮影しにくくなっていくんですよね。街全体にそういう、立ち止まらせるような面白さがあります。あと日本！美しい所ですからね。

あとは、お子さんや犬なども引き続き撮影されて行かれるんでしょうね。

そうですね、人と動物。その一番かわいいところ、ハンサムだったり美しかったり、そういうところを撮りたいです。ポーズを決めてハイ！っていうのではなく、その人や動物が生きているその横から、輝いた瞬間を私が切り取る、そういうのっていいですね。とにかく写真は、これからもずっと撮り続けていこうと思います。

ニューヨークで撮影された写真をまた拝見できる日を楽しみにしています。今日はありがとうございました。



『ゆぎ姐のニューヨーク裏うら散歩』
(ワニブックス/本体1200円+税)
/ 『ふんちんタマすだれ』
(ワニブックス/本体940円+税)

『裏うら散歩』は兵藤さんが見て歩いたニューヨークを、写真とともに紹介する情報満載のガイドブック。

そして『ふんちんタマすだれ』は、ニューヨークでの暮らしを綴ったほのぼのエッセイ。どちらも兵藤さんならではの視点でニューヨークが描かれている。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.